

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

ー ボール運動における基礎的な運動技能の指導の工夫を通して ー

登米市立登米小学校 武田 香代子

1 目指す授業像

- (1) ボール運動における、運動領域に応じた運動技能を明確にし、課題解決に必要な準備運動や補助運動を取り入れることで、主運動の運動技能を高められる授業
- (2) 運動領域に応じた運動技能とそれに伴う補助運動を明確にした系統表を基に、補助運動を計画的に取り入れた授業
- (3) 自己やチームの課題解決のための作戦を立て、互いに認め合うことでより達成感を味わえる授業

2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

小学校学習指導要領解説（平成29年告示）体育編，第1章総説，2体育科改訂の趣旨及び要点では，小学校，中学校及び高等学校を通じて，生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成を図ることと示している。改訂の要点の一つとして，発達段階のまとまりを考慮し，各領域で育成することを目指す具体的な内容の系統性を踏まえた指導内容の一層の充実を図ることと示している。

これまでも学年の発達段階を考慮し，系統性を踏まえた指導計画を立て，指導に当たってきた。しかし本校の教員に行ったアンケート調査から，系統の見通しは6年間の中の一部の見通しになることが多く，学校全体で具体的な指導のポイントを共通理解しながら指導してきたとは言い切れないことが分かった。小学校6年間の系統性ある体育の指導の工夫を通して，子供たちの体力や技能の向上を図るだけでなく，積み重ねた運動技能により，できた喜びを多く味わうことで，運動への興味関心が高まり，生涯にわたって運動やスポーツに親しむことにつながっていくのではないかと考える。

本学級の児童の実態として，ボール運動の経験があまりない児童が多いことを踏まえ，ボール運動の領域に焦点を当て，基礎的な運動技能の課題について把握し，系統性を踏まえて学年に応じた指導の工夫を図っていきたいと考えた。子供たちが体育の授業を通して，課題を見付け，自己の目標を達成しながら，将来スポーツに親しむための基礎となる運動技能を身に付けていけるような授業を目指していきたいと考え，本テーマを設定した。

目指す授業像に迫るために，ボール運動の各単元における身に付けさせたい運動技能について学年ごとに系統表を作成していきたいと思う。その系統表を基に各時間に補助運動を指導計画に組み入れ，主運動につながる運動技能を習得し，主運動でできた喜びと達成感を味わわせたいと考えた。

3 I期の取組について 【単元名 ボール運動「バスケットボール」】

(1) 研修テーマに迫るための手立て

I期では，小学校5年生のボール運動のバスケットボールの単元において授業実践を行った。授業実践に当たり行った運動に関するアンケート調査では，本学級の児童の9割が「運動することが好き」，または「やや好き」と答えている。しかし，長い距離を走ったり，素早い動きをしたりする運動に苦手意識を持っている児童もいるのが現状であった。友達と励まし合って運動している中でも，勝敗にこだわるあまりに負けたときに友達を責めてしまう児童も見られた。

ボール運動の中のゴール型の一つであるバスケットボールについては，4年生でハーフコートバスケットボールを行ってきた。スポーツ少年団などでバスケットボールに日常的に取り組んでいる児童はいないものの，技能の差が見られた。アンケート調査では，9割の児童がバスケットボールをすることが「好き」あるいは「やや好き」と答えていた。その多くは「シュートが楽しい」と答えており，

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

パスやドリブルなどに楽しさを感じている児童もいた。嫌いと答えている児童は、「ドリブルやパスが難しい」、「失敗すると文句を言われる」などの理由を挙げている。しかし、「ドリブルが上手になりたい」、「チームプレーができるようになりたい」という願いも持っている。このことから基礎となる運動技能を高めることや、自信を持ってゲームができるようなルールの工夫が必要であると考えた。

(2) 具体的な手立て

① 系統表を基に、ボール運動における運動領域に応じた運動技能を明確にし、課題解決に必要な準備運動や補助運動を位置付け、主運動へつなげる工夫

ア 6年間の運動技能の系統性を考えた指導内容を整理し、運動技能を中心とした一覧にまとめ、学年に応じた身に付けさせたい運動技能を踏まえた学習課題を設定した。

イ 前年度まで練習してきたパスやドリブル、シュートなどの基礎的なボール操作の技能を向上させるために、単元を通した補助運動としてパスやドリブル、シュートなどを取り入れたミニゲームやスキル運動を行った。1時間ごとに身に付けさせたい技能を明確にし、目標を持たせて取り組ませるようにしてきた。本時の目標とする運動技能について、教師が実際に動きを見せることでより具体的に理解できるようにさせた。

ウ 後半の主運動のゲームでは、得点を挙げた児童が抜けていくことで、次の攻撃側のプレイヤーの人数が守備側のプレイヤーの人数を上回り、数的有利になるようなルールにした。攻撃側が有利になることで、補助運動で身に付けた技能をゲームの中で生かすことができるようにした。また、ゴール下の攻防で防御をすることができないフリーゾーンを設定し、攻撃側が有利な状態を生かしながら、フリーゾーンでパスをつなげ、シュートの機会を増やす動きを習得できるようにした。

② 自己やチームの課題解決のための作戦を立て、互いに認め合うことでより達成感を味わわせる工夫

ア 主運動の練習では、ハーフコートから始めて、オールコートへ段階的に動きのスペースを広くしていった。はじめはチームの人数を少なくするなど、ルールを工夫することで、一人一人がプレーに参加しシュートができることを目指し、互いの技術の向上を認め合ったり、課題に対して助言し合ったりできるようにした。

イ 試合がないときは作戦タイムを設けて役割分担をし、グループの一人一人を生かすことを繰り返し考えられるようにした。

(3) 成果と課題 (○：成果，●：課題)

① 系統表を基にボール運動における、運動領域に応じた運動技能を明確にし、課題解決に必要な準備運動や補助運動を位置付け、主運動へつなげる工夫について

○ 昨年までの学習を踏まえながら、5年生で身に付けさせたい基礎的な運動技能を明確にし、主運動の中で補助運動を生かそうとする児童の姿が多く見られるようになった。

○ 本時でどんな運動技能ができればいいのかの目当てを提示し明確化してきたことで、補助運動から意識して取り組むことができた。

○ 身に付けた運動技能が、より主運動で生かせるようなルールの工夫を行ったことで、空いているところでパスをもらい、シュートを打つことができる児童が増えた。

○ 必要な補助運動を繰り返し取り入れたことで、運動技能の向上と補助運動を生かしたチーム練習に取り組む場面が見られた。

● 「どンドンパスゲーム」では、パスのみに集中するがあまり、体の向きについての意識が低下しがちになる傾向が見られた。

● 主運動に向けた運動技能を高めるための補助運動について検討してきたが、模擬授業の中で問



図1 どンドンパスの動きの手本

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

題が見つかり、内容を検討し授業実践を行った。I期の授業実践でも基礎的な運動技能の向上のための補助運動と言えるかどうか再検討の余地がある。基礎的な運動技能としての補助運動の捉え方と内容の編成について更に検討していかなければならない。

- 運動技能の系統についてまとめている系統表を作成してきた。I期の実践の反省も踏まえて各時間に取り組む補助運動の運動例とそのねらいが分かるように、改善を加えていく。また、ボール運動において基礎的な運動技能だけでなく思考・判断・表現や主体的に取り組む態度等の評価基準を踏まえた系統の示し方を更に検討し、学校現場で活用しやすいものにしていく必要がある。
- ② 自己やチームの課題解決のための作戦を立て、互いに認め合うことでより達成感を味わわせる工夫について
 - 「どンドンシュート」では、ただシュートによる得点を重ねるだけに留まらず、チームごとに目標を持たせて取り組ませていたので、それぞれのチームで達成感を持つことができていた。
 - 主運動では、ゲームがない時に作戦タイムを設定することで、チームの中で役割分担をしたり、友達を生かした作戦を考えたりすることができた。
 - 個々の役割を練習に生かすことができたため、一人一人がチームの一員としての達成感を感じるようになるようになった。
 - 補助運動で取り組んできたことを主運動で生かした場面を、称賛と共に全体に紹介することで達成感とチームプレーの意識を高めることにつながった。
 - チームとして、良いプレーを賞賛することや、アドバイスし合う姿を具体的に示し、互いに認め合うことができるようになったことで、授業後の感想でチームプレーの楽しさや達成感を話す児童が増えた。
 - 学習カードを用いることで、本時の学習を振り返ったり、次時の活動の見通しや目標を持ったりすることができた。
 - 作戦板を使用するチームがあったものの、なかなか使いこなせていないのが現状であった。話し合う観点を示すなどの工夫が必要であった。
 - 同じ指示や指導を行っても学びの支援が必要な児童へ、より具体的な指導の在り方や、分かりやすい指示の仕方などを工夫していく必要がある。



図2 チームの作戦タイム

4 II期の取組について 【単元名 ボール運動「ソフトバレーボール」】

(1) 研修テーマに迫るための手立て

I期の授業実践ではバスケットボールにおける基礎的な運動技能の課題について把握し、系統性を踏まえて学年に応じた指導の工夫を行ってきた。子供たちは体育の授業を通して課題を見付け、自己の目標を達成することで達成感を味わうことができた。I期は特に運動技能を高めることを重点的に取り組んできたが、授業実践を通して運動技能が高まったことの達成感に加え、ボール運動の特性からチームでの役割分担とそこから生まれるチームプレーの成功による達成感も実感することができた。将来スポーツに親しもうとする児童を育成するためには、基礎となる運動技能を身に付けていくとともに、チームとしての関わり方やチームプレーの楽しさを味わわせることが大切であると考えた。

そこで、基礎的な運動技能と思考・判断・表現や主体的に学習に取り組む態度など、目指す児童の姿を系統表に示していくことも更に検討しなければならない。ただし、系統表は複雑になりすぎると活用しづらいため、補助運動を中心に示しすぐに活用できることに重点を置いて作成した。本単元では、その系統表を生かしながら主運動に生かすことができる補助運動を各時間に計画的に取り入れ実践してきた。また、系統表のどの部分が本時の学習に生かされているのかを指導案に示すこととした。

(2) 具体的な手立て

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

① 系統表を基にボール運動における、運動領域に応じた運動技能を明確にし、課題解決に必要な準備運動や補助運動を位置付け、主運動へつなげる工夫

ア 系統表では学年に応じた身に付けさせたい運動技能を踏まえた学習課題を設定した。特に主運動につながる補助運動を位置付けることに重点を置いた。単元を通して身に付けさせたい技能とそのため補助運動を一覧で見ることができ、各時間の指導に生かすことができた。

イ 昨年まで取り組んできたキャッチバレーボールの基礎的なボール操作の技能を向上させるために、単元を通じた補助運動としてサーブ、アンダーハンドパス、オーバーハンドパス、スパイクなどを取り入れたミニゲームやスキル運動を行った。特にアンダーハンドパスに重点を置き、1時間ごとに身に付けさせたい技能を明確にし、目標を持たせて取り組ませるようにしてきた。本時の目標とする運動技能について、教師が実際に動きを見せることでより具体的に理解できるようにさせた。

ウ 後半の主運動のゲームでは、コートを広さを、バドミントンコートとし、ネットもバドミンントンのネットを使用する。4～5人のチームで、4人がコートに入りローテーションを行う。できるだけ3回で相手コートに返球できるように助言していくことで、レシーブしたボールを味方にパスをすることが目標となり、補助運動の取組が主運動に反映できるよう意識させた。また、チームプレーを意識することで、その他の児童も次のプレーを予測して動くことにつながり、一人一人が攻撃に参加できるようにした。

② 自己やチームの課題解決のための作戦を立て、互いに認め合うことでより達成感を味わわせる工夫

ア 試合の合間は作戦タイムを設けて、役割分担ができるようにするとともに、互いの技術の向上を認め合ったり、課題に対して助言し合ったりできるようにした。

イ 特に意識させたい運動技能については全体で実践させたり、目標とする運動技能ができたときはみんなで称賛させたりした。

(3) 成果と課題 (○：成果，●：課題)

① 系統表を基にボール運動における、運動領域に応じた運動技能を明確にし、課題解決に必要な準備運動や補助運動を位置付け、主運動へつなげる工夫について

○ 本時でどんな運動技能ができればいいのかの目当てを提示し明確化してきたことで、補助運動から意識して取り組むことができた。

○ 昨年経験したキャッチバレーボールを生かしながら基礎的なボール操作の技能を向上させるために、「落とすなボールキャッチゲーム」の補助運動を行うことで、ボールの落下点への移動や膝の使い方などの動きに慣れ、主運動で生かすことができるようになってきた。

○ 本時の目標とする運動技能について、実際に見本の動きを見せることでより具体的に理解でき、その後の練習に生かすことができた。

○ 系統的な補助運動を繰り返し取り入れたことで、運動技能の向上と主運動へ生かしていくためチーム練習にも取り入れる場面が見られた。

● 補助運動でのアンダーハンドパスの運動のポイントを、さらに児童に分かりやすく伝えるための教材研究の工夫が必要であった。

● ゲームの中でうまくパスが繋がらなかったチームもある。パスをつなげてチームプレーを行う上で、次のプレーを予測した動きが必要になる。「落とすなボールキャッチゲーム」や「円陣パ



図3 本時の目当てと学習の流れの確認



図4 落とすなボールキャッチゲーム

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

ス」などの補助運動の中で、次のプレーにつながる声掛けについても指導することで、次にどこに動くのかを予測させ、素早くプレーに生かすことができるようにしていきたい。

② 自己やチームの課題解決のための作戦を立て、互いに認め合うことでより達成感を味わわせる工夫について

- 本時の目当てを確認し、目標とする運動技能を明確にしたことで、望ましい動きを意識できるようになり、活動の中で称賛し合う姿や、できない児童を励ましたりアドバイスしたりする姿が見られた。
- チーム練習時やゲームの間に作戦タイムを設定することで、チームの中で役割分担をしたり、友達を生かした簡単な作戦を考えたりすることができた。
- 3つ目のボールで攻撃することを目標とすることで、役割を意識したプレーを心掛けるようになってきた。一人一人がチームの一員としての意識が高まり、達成感を感じることができるようになった。
- 補助運動で取り組んできたことを主運動で生かした場面を称賛するとともに、全体に示すことで達成感とチームプレーの意識を高めることにつながった。
- 消極的だった児童や自信が持てなかった児童も、友達に称賛されることで、積極的にプレーに参加できるようになった。また、楽しく活動できるようになったことを学習カードへ記入していた。
- 学習カードを用いることで、簡単に本時の学習を振り返り自己評価をすることができた。また次時の活動の見通しや目標を持つことができた。
- 作戦タイムに何を話していいかわからないチームは、すぐにパス練習になることが多かったので、話し合う内容を具体的に示す必要があった。
- 失敗したことで落ち込む児童がいるので、そこまでできていることを認める言葉掛けや励ましの言葉を掛けてからアドバイスできるような、声掛けについても随時よい例を示しながら定着させていきたい。

ソフトバレーボール学習シート		名前 ()	
レシーブやトスなどのボール操作と、ボールを持たないときの位置取りを意識し、ソフトバレーボールをすることができる。			
自分のめあて	レシーブで仲間にパスをする。	今日のめあて	自分のめあて
1	ソフトバレーボールのめあてを決める	◎	△
2	サーブを打ったり、ボールの落下点でレシーブしたりすることができるようにする	◎	◎
3	サーブを打ったり、ボールの落下点でレシーブしたりすることができるようにする	◎	◎
4	ボールの落下点に素早く移動してレシーブをする	○	◎
5	ボールの落下点に素早く移動してレシーブをする	○	◎
6	次のプレーを意識して、ボールの落下点に素早く移動してレシーブをする	◎	◎
7	チームで役割を考えながら、試合をする	○	◎
(反省) ボールの落下点に入ってレシーブで仲間にパスをできたからよかった。			
(よくできた◎, できた○, もう少し△)			

図5 II期学習カードへの記入

5 1年間の総括

(1) 研修の成果

補助運動を授業の前半に入れることを基本的な授業スタイルとしてきたことで、体育の授業形態の定着が図られた。また、補助運動の取組によって、主運動の技能向上に効果的であることを多くの児童が気付くようになった。事後のアンケート結果からも「補助運動を主運動に生かすことができた」「だいたいできた」と答える児童がほとんどであった。補助運動が主運動にどのようにつながるのかを意識して運動することで、日々の学習の中でうまくできるようになってきたことを実感する児童が増えた。また、パスがつながることで次のプレーが生まれ、チームプレーの楽しさを味わうことができるようになってきた。この積み重ねができた喜びを感じ、楽しいと感じる児童が増えたことにつながったのではないかと考える。

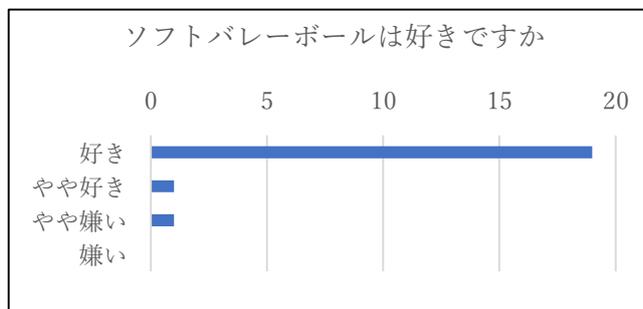


図6 II期ソフトバレーボールに関する意識調査

補助運動が主運動にどのようにつながるのかを意識して運動することで、日々の学習の中でうまくできるようになってきたことを実感する児童が増えた。また、パスがつながることで次のプレーが生まれ、チームプレーの楽しさを味わうことができるようになってきた。この積み重ねができた喜びを感じ、楽しいと感じる児童が増えたことにつながったのではないかと考える。

小学校における系統性を踏まえた指導の工夫

系統表と関連付けた授業を実践したことで、学年に応じた運動技能の習得を意識した指導ができた。児童の意識調査や授業での児童の変容からも、単元ごとの基礎的な運動技能を理解し、補助運動を簡単な動きから負荷の高い運動へと段階的に順序立てて取り組ませることによって、主運動の運動技能の習得がより効果的にできていることが分かった。ボール運動の運動経験があまりない児童が多い中で、基礎的な運動技能を補助運動として取り入れることは、どんな動きが必要なのか児童自身が意識することになり、主運動の運動技能の習得にも生かされた。さらには、互いの動きを意識して見ることができるようになり、称賛したりアドバイスしたりする姿も多く見られた。チームワークの高まりは児童の運動意欲を向上させることに効果的であった。

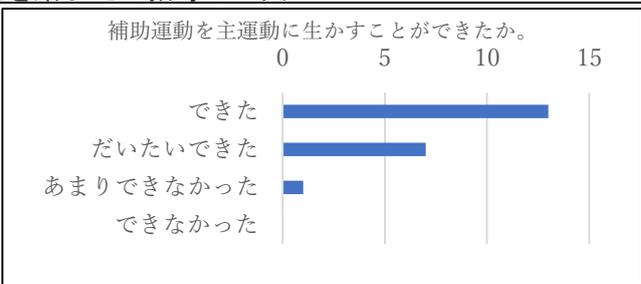


図7 II期補助運動に関する意識調査

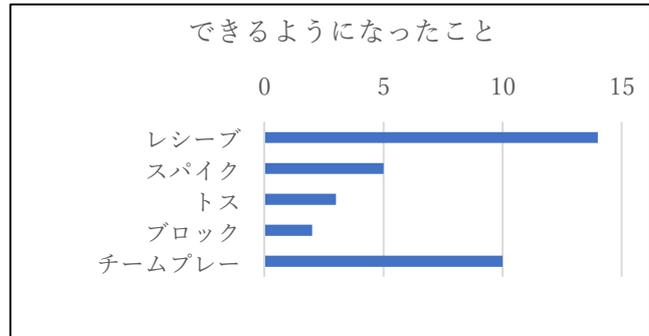


図8 II期できるようになったこと

また、研究授業として本校の教員も多数参観し、授業評価シートで客観的な授業の評価をいただいた。その中で「系統表があることで、前年度までの学習内容が把握でき、どんな補助運動を行えばよいか参考になる。」「補助運動という意識があまりなかった。補助運動の必要性を考え、意識して授業に取り入れたい。」という意見があった。体育の授業について自信が持てないという教員もおり、今回の研究授業の提案は現場の教員と体育の授業の流れや、本研修のねらいを共有するきっかけとなった。

(2) 今後の課題

今回の研修でボール運動の中の「バスケットボール」と「ソフトバレーボール」の系統表を作成し、授業実践を行ってきた。系統表の形式も何度も検討し直し、特に補助運動についてねらいとその運動例を見取れるものにした。あまり複雑にせず、すぐに活用できることを意識して作成したものである。II期の研究授業の指導案とともに系統表も示したことで、授業を参観した教員の多くが系統表と授業の関わりについて理解を高めた。しかし、実際に系統表を基に実践したのは本授業のみであるため、学校現場での複数学年で系統表の有用性についてはまだ検証していない。系統表を各学年の年間指導計画とともに活用し授業実践を行うことで、さらに活用しやすい系統表の在り方の検討や、ボール運動における他の運動領域の系統表の作成も行っていきたい。

また、I期II期と補助運動を意図的に位置付けて授業を組み立ててきたことで、児童の学習習慣も身に付き、スムーズな授業の流れが定着してきた。教員の感想から、「授業の流れが参考になる」との意見が多かった。本研修で、体育の授業を苦手とする教員でも取り組める授業形態について提案できるよう、さらに研修を深めていきたい。

主な参考文献

文部科学省：学校体育実技指導資料 第8集「ゲーム及びボール運動」 平成22年3月
 文部科学省：教師用指導資料 小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック（低・中・高学年）平成23年3月

図表等の許諾について

図1、図2、図3、図4は授業実践の中での子どもの様子である。児童が特定できないようにすることとし、児童の保護者から使用許諾を得た。

図5は、授業実践の中での子どもの学習カード記述の一部である。児童氏名を伏せて掲載することとし、児童本人と保護者から使用許諾を得た。